

## 作品紹介 関蓑洲「象図」

画面いっぱいに大きく描かれた1頭の象。2曲1隻の屏風に迫力のある姿で描かれているが、やや窮屈そうであり、その目はどこか寂しげにも見える。絵の周囲には更紗(人物・鳥獣・花などの模様を多色で染めた布でインドやジャワなどから渡来した)が用いられており、異国情趣がよりいっそう強調されている。

この絵を描いたのは、幕末の大坂を中心に活躍した関蓑洲(1802~1875)という絵師である。詳しい伝記はわかっておらず、現存作例もあまり知られていないが、同じ大坂の絵師である鎌田巖松(1798~1859)に絵を学び、山水・人物・花鳥を得意としたと伝えられる。画面右上に、「慶応丙寅春桃花節応需蓑洲真写」と記されていることから、慶応2年(1866)の春、桃花の節句に蓑洲が描いたことがわかる。また、「真写」と続けて記されていることから、象のありのままの姿を描いた作品と考えられる。確かに、画面を注意深く見てみると、頭部から背中にかけて生えている毛や、生々しい鼻の描写などからは、象を目の当たりにして描いたようなリアルな感覚がうかがえる。

実際、この絵のモデルになったと考えられる象の存在が知られている。その象は、アメリカ船により横浜港にもたらされ、文久3年(1863)に江戸の西両国で見世物になったとされる象である。この象の人気は大変なものだったらしく、江戸では象の姿を描いた浮世絵が数多く刊行された。同年刊行の『舶来絵象紙』という冊子に記された仮名垣魯文の「舶来象略演義」においては、この象について次のように説明されている。

ときに 文久三癸亥三月上旬より、江都西両国広小路に於て、諸人の眼目を新にする大象の雌一匹、元来天竺馬爾加国ヒツプルヘルゲン山のふもと数千里の大原野に生じて、今年僅に三歳、総身灰色にして、頭の長さ四尺二寸、同巡り一尺五寸、末のかたにては六寸ばかり(後略)

これによれば、文久3年の3月上旬から江戸の西両国の広小路で見世物となった象は、インド生まれのメスで、この年に3歳であったことがわかる。その後、明治7年(1874)まで全国各地を巡回したとされており、大坂では慶応2年の正月から難波新地で見世物になっている。同年春に蓑洲の「象図」が描かれていることから、この象がモデルになったと考えられているわけである。

そのような目で「象図」を詳しく見てみると、比較的ラフな筆致ではあるものの、アジア象(インド象)の特徴がよく捉えられていることに気づく。アフリカ象より小さく四角い耳、短い牙、先端の上部に突起のある鼻、さらには二つの盛り上がりのある頭、前足に5つ後足に4つある蹄、丸いかたちをした背中など、アフリカ象とは異なるアジア象の特徴がしっかりと描かれている。これらの描写は、観察の賜物と言っていだろう。

大坂においては浮世絵に描かれることはほとんどなかったようだが、蓑洲のほかにも、玉手棠洲(1795~1871)や藪長水(1814~1867)といった大坂の絵師たちがこの象を描いている。それらの中においても、蓑洲が描く象はひときわ大きく迫力があり、アジア象の特徴を的確に捉えている点で特筆すべきものがある。蓑洲により「真写」されたリアルな象の姿は、実際の象を目の当たりにしたのと同じくらいの驚きを当時の鑑賞者に与えたことだろう。

本物の象を目にする機会はほとんどなく、写真なども普及していない時代、一般的な象のイメージといえば、普賢菩薩像や涅槃図、あるいは江口の君図や二十四孝図などに描かれた理想化された白象の姿であった。現代の我々の目からすると当たり前のように感じられる蓑洲の「象図」は、当時の人々にとっては逆に異様なものに見えたかもしれない。

大政奉還を翌年に控えた慶応2年、画家の冷徹な眼差しにより描かれた「象図」は、近代の幕開けを感じさせてくれる点でも興味深い作品なのである。

(秋田達也)



《象図》 関蓑洲 慶応2年(1866) 紙本墨画淡彩 2曲1隻 174cm×139cm 本館蔵(倉田陽三氏寄贈)